

# 「杜受田奏」の鎮圧方略 ——太平天国前夜における清朝中央政府の地方把握——

朱 勃 瑀

## はじめに

一八五〇年、太平天国前夜における広西では、民間宗教、天地会に代表される秘密結社、盗匪など、清朝政府から見れば、いわば教匪・会匪・土匪と称される反乱集団が暗躍した。その動乱の時代についての研究においては、天地会や太平軍などの反乱者の視点から展開される傾向が強かった<sup>1)</sup>。経済の不況や官界の腐敗などの社会・政治的背景を検討したものだけでなく、相互扶助を目的に盛んな結拜兄弟の儀礼を行った下層移民・天地会系結社の活動との関連性<sup>2)</sup>や、反対に太平軍に厳しい局面をもたらした天地会の蜂起<sup>3)</sup>といった新たな研究結果もある。そのような研究はすでに、「どのような反乱者が活躍していたのか」のリサーチクエスチョンを検討する段階を超え、賊匪の後ろ盾である「米飯主」<sup>4)</sup>や上帝教の布教と受容<sup>5)</sup>等が着目され、太平天国前夜の反乱者の実態が明らかになっている。そのような研究と比べ、鎮圧者側である清朝政府<sup>6)</sup>の視点からの研究は今まで必ずしも重視されてこなかった。反乱に対して清朝政府は如何なる対応を行っていたのかといった歴大な質問に関して、史実に基づく政治・軍事方面からの基礎的考察が行われてきた。

崔之清氏によると、咸豊帝は広西巡撫鄭祖琛・広西提督閔正鳳に、緑営軍を用いて反乱を鎮圧するよう厳命した。また、周辺の貴州・雲南・湖南などからも兵勇を広西へ向かわせたが、反乱を鎮圧できなかった<sup>7)</sup>。その後、閔と鄭の二人を「畏葸无能」<sup>8)</sup>・「欺飾彌縫」<sup>9)</sup>として革職し、赴任中に病死した林則徐の代わりに李星沅を欽差大臣、周天爵を署理広西巡撫、向榮を広西提督に任命し、「金田会匪」<sup>10)</sup>などによる広西の反乱を鎮圧させた。また、崔岷氏は鄭祖琛と両広総督徐広縉の奏摺を用いて金田団營以前の清軍の軍事調達を検討し、咸豊帝は次第に広西の反乱の厳しさを意識するようになったことを指摘した<sup>11)</sup>。夏春濤氏も咸豊初期における清朝の官界の混乱、太平軍に対峙する各地の官員の能力の欠如、緑営軍の戦力の弱さを指摘した<sup>12)</sup>。菊池秀明氏は清軍に捕らえられた李進富の供述と欽差大臣李星沅の奏摺を用いて、金田・江口における上帝会の活動の分析を行い、上帝会の人数を判断していたことを明らかにした<sup>13)</sup>。以上のこれらの研究を踏まえ、広西の反乱の状況に対する清朝政府の軍事調達・人事任命の過程が明らかとなった。

こうした先行研究の到着点を踏まえ、筆者は一八五一年、清朝協弁大学士・刑部尚書杜受田の奏摺「咸豊元年二月初八日・杜受田奏陳両広起事情形並剿捕方略單」<sup>14)</sup>の史料に着目した。その奏摺は、「反乱状況のまとめ」と「反乱の鎮圧に対する方略」の二部分に構成され

ている。

奏摺の「反乱状況のまとめ」では、夏春濤氏は上林県、武縁県などの匪賊に関する記述に着目し、地方政府の能力の無さを指摘した<sup>15)</sup>。また崔之清氏は道光二五・二六年の広西左江・右江周辺の広東匪賊に関する記述に着目し、両広地域天地会の状況を分析した<sup>16)</sup>。

それらの研究に比べ、「反乱の鎮圧に対する方略」の「整軍威」・「募精勇」・「勸郷団」・「察地形」・「務解散」の五つの方略は、目新らしさを欠いた通俗的なものとみなされがちであり、従来の研究では重要視されていなかった<sup>17)</sup>。しかし、その五つの方略は緑営軍・郷勇・団練などの研究対象と深く関わっており、当時の広西の軍事社会を理解する上で重要な視点を提供していると考ええる。緑営軍の調達、官員の任命のような清朝中央政府の施策にとどまった従来の研究よりも、「杜受田奏」の鎮圧方略に着目して分析することで、先述の鎮圧者の視点についての研究の可能性を広げることができる。太平天国前夜の広西が混乱していたことや、清朝政府の能力が欠如したというのは周知の事実であるが、筆者の関心は、当時の広西がどの程度混乱していたのかという問題も視野に入れながら、清朝中央政府がどの程度当時の広西の反乱を把握していたのか、また反乱鎮圧の手段としての緑営軍・団練・郷勇についての能力を、清朝中央政府がどの程度認識していたのかがりサーチクエスションである。つまり、雲・貴・湘の緑営軍に関する調達の史実を明らかにした上で、その背後に隠された清朝中央政府が当時の局面に対する判断を分析し、李星沅、周天爵、向榮などの反乱地における清朝地方官員の視点よりも、「杜受田奏」に基づく清朝中央政府の地方把握に着目し<sup>18)</sup>、太平天国の乱に直面した緑営軍・郷勇・団練などの軍勢力に対する認識のありようを明らかにする。

## 一、「杜受田奏」の史料分析

「杜受田奏」による清朝中央政府の地方把握を検討するために、最初に指摘しておきたいのは、清朝中央政府での杜受田の地位である。つまり杜受田と咸豊帝、清朝中央政府の関係をまず整理する。

咸豊帝の師であった杜受田は、咸豊時代の一般官員ではなく、清朝の国政を左右する存在であった。咸豊帝は即位した後、「朕は六歳から上書房に入り、経書の勉強を始めた。先帝は、杜受田に特別に朕のために講習討論を担当させた。十数年にわたり多方面に啓蒙を受け、勤勉してゆるがせずに、大いに裨益するところとなった…杜受田に太子太傅という肩書きを賜与した」<sup>19)</sup>とあるように、師としての杜受田を賞賛した。そして、杜受田を協弁大学士に任命し<sup>20)</sup>、「杜受田に礼部の事務を管理するように命じた。召される時には杜受田に人事、行政、国家と民衆に関する重要な事柄に対して、その忠言により良く補い助けた」<sup>21)</sup>とあるように、国家の大事に関わる問題に対して、要職にある杜受田の意見を求めた。また、一八五二年に杜受田が逝去した際には、咸豊帝は大変悲しみ、「卿の不幸は実に朕の不幸である」と直言し、さらに慣例を破って、内閣の票擬を待たず自ら杜受田に「文正」の諡号を賜

与した<sup>22)</sup>。

従って、咸豊初期の清朝中央政府においては、杜受田は強い影響力を持っていたことが明らかである。長年、師として皇帝から強い信頼を寄せられていたからである。そして、「咸豊元年二月初八日・寄諭李星沅等著按杜受田单内所陳詳加採擇認真妥弁」<sup>23)</sup>で、咸豊帝は「杜受田奏」の提議に同意し、「その五つの方略はかなり詳細かつ明晰である」<sup>24)</sup>と評価した上で、欽差大臣李星沅にしっかりと実行するように命じた。広西の欽差大臣李星沅は「杜受田奏」の提議を重視し、「臣は大学士・刑部尚書杜受田の奏摺を受けた。広西反乱の被害の原因と地域、そして対策法がすべてずばりと言われた…すでにそれらの方略を実行した」<sup>25)</sup>と報告した。

そのため「杜受田奏」は、単に両広地域の反乱に対して、個人的な提議をしたというだけではなく、清朝中央政府が反乱を鎮圧するために出した、いわば処方箋のようなものであったと思われる。つまり、清朝中央政府がどの程度、広西の反乱を把握していたのかなどの問題を解明するためには、「杜受田奏」を分析することが重要な切り口である。

杜受田はまず広西の反乱が道光初期に興起し、道光二五・二六年には事態がさらに悪化したことを論じた。特に道光三〇年に広西修仁・荔浦の県城に侵入した広東の英徳・清遠の会匪を例に、「広西に重大な略奪案件には、その賊首は主に広東の匪賊である」と、広東の匪賊が広西地域に与えた影響を指摘した。そして南寧の張家祥<sup>26)</sup>・張家復・寧牛仔・潯州の大頭揚<sup>27)</sup>・賓州の陶老八<sup>28)</sup>・顔亜有・文亜英<sup>29)</sup>・横州の謝江店<sup>30)</sup>・方亜廷・楊連芳・梧州の鄧立奇<sup>31)</sup>・鄧亜八<sup>32)</sup>・平樂の陳亜潰<sup>33)</sup>といった広西各地で暗躍する反乱者の状況をまとめ、『堂匪総録』、『股匪総録』、広西の地方志などの史料と照合すると、「杜受田奏」にまとめられた反乱者が主に道光末年から広西各地に暗躍していた「地方大匪」であることがわかる。

前述したように、従来の研究では、そのような匪賊の騒乱についてのまとめが重視され、道光三〇年の広西の混乱や太平天国の金田団営前の背景の分析が行われてきた。これらに対し、筆者の関心は「杜受田奏」によって「清朝中央政府がどの程度当時の広西の反乱について把握していたのか」という問題にある。清朝中央政府は「どのように」広西の反乱の状況を把握したのかにあり、そのためには清朝中央政府の入手しえた情報のルートについて検討しなければならない。

北京の清朝中央政府にとって、反乱地である広西の状況を有効的に把握する手段は地方大員の奏摺である。杜受田がまとめた広西匪賊の状況については、道光三〇年において、元広西巡撫鄭祖琛、両広総督徐広縉、貴州巡撫喬用遷などの地方官員の奏摺の内容と照応することができる。

表1：「杜受田奏」と督撫の奏摺の比較（典拠：『清政府鎮圧太平天国档案史料』第一冊により筆者作成）

咸豐元年二月初八日 「杜受田奏」	道光三〇年以來 地方総督、巡撫の奏摺（寄諭に引用された前奏の内容を含む）	
道光三〇年に広西修仁・荔浦の県城に侵入し略奪	「道光三〇年八月初七日・徐広縉奏報広西修仁失守擬親往督弁摺」 <sup>34)</sup>	「広西修仁、荔浦の県城を侵入」
南寧の張家祥・張家複、平樂の陳亜潰を提起	「道光三〇年五月一九日・寄諭鄭祖琛將慶遠等地滋事會首張家福陳亜貴等嚴查懲弁」 <sup>35)</sup>	張家複、陳亜貴
潯州の大頭揚、賓州の陶老八を提起	「道光三〇一二月二四日・喬用遷奏報續獲広西會衆遵旨訊明広西各股情形摺」 <sup>36)</sup>	大頭羊、陶八
梧州の鄧立奇を提起	「道光三〇一二月二七日・李星沅等奏報拿獲張晚鄧立奇審明正法片」 <sup>37)</sup>	「梧州属積年巨盜鄧立奇」
「龍州同知王淑元父子が城に殉じてしまった」	「道光三〇年九月二七日・寄諭鄭祖琛等著設法先分昭平明江各股之勢安撫百姓嚴飭迅剿」 <sup>38)</sup> 「道光三〇年一〇月二四日・鄭祖琛等奏報寧查明等處被擾並明同知王淑元等傷亡情形摺」 <sup>39)</sup>	「同知王淑元が行方不明だ」 「王淑元父子が賊匪に殺されて斃命しまった」

そのうえ、杜受田は奏摺のなかに「新任提督向榮は自ら兵士の先頭に立って、柳州・慶遠から横州・賓州に至り、索譚・陶旺などの多处に続けて勝利を収めた。陳亜潰、張家盛、覃香晚等匪賊が殲滅され、その勢いが削られた」と言及した。実際、その内容は道光三〇年一二月向榮の奏摺と緊密的に照応することができる。一二月初三日において、広西提督としての向榮は連続で「進剿横州會衆大獲勝仗」、「官兵進攻索譚會衆大獲全勝」、「官兵在陶鄧墟獲勝仗」の奏摺を上奏し、向榮自身が慶遠における覃香晚・張家盛及び索譚・陶旺の反乱者を殲滅し、横州・賓州へ進剿をしたことがわかる。そのため、杜受田は地方大員の奏摺の内容によって、広西の状況を把握したと考えて間違いない。

情報収集のもう一つ手段は「京控」とよばれる地方官民が提出した北京の政務監察機関である都察院への控訴状である。「道光三〇年八月二九日・都察院奏広西拳人李宜用等控情形摺」<sup>40)</sup>によって、拳人李宜用は、南寧・柳州・平樂・潯州・梧州などの六府の武拳・監生・生員とともに、下僕何達に抱告（代告・代訴）させ、北京へ控訴状を提出し、南寧府左江・柳州府右江における張家祥・陳亜貴などの匪賊の横行、鎮圧できない官兵、またそれらを地元の府・道・臬司衙門へ控訴したが、対応されなかったことを訴えた。そして紳士莫子昇の控訴状も、「また來賓の匪首である文亜英などが数千の兵力を擁する…」<sup>41)</sup>を提起した。このように、張家祥・陳亜貴・文亜英などの匪賊の騒乱状況が明らかとなった。

表2：都察院への控訴状（典拠：『清政府鎮圧太平天国档案史料』第一冊により筆者作成）

控訴人	形式	匪賊
南寧府宣化県挙人李宜用など 武挙・監生・生員一二人	抱告何達を派遣	張家祥、楊擄家
慶遠府紳士莫子昇など二三名	抱告莫有發を派遣	陳亜貴、黄四、張亜珍、文亜英
南寧府宣化県生員何可元	自ら提出	外匪が土匪と結託し略奪をした

これらのように、清朝中央政府が情報を入手しえた手段は、地方大員の奏摺・都察院が受理した京控案件等であつたと思われる。言いかえれば、広西地方の状況については、奏摺や京控を通じて北京へ伝達している。そして、清朝中央政府官員がこうした伝達された情報を入手する重要な手段が邸抄<sup>42)</sup>であつた。道光三〇年九月一三日、鴻臚寺卿呂賢基が、「臣が前月に邸抄を閲覽しました。広西平樂、潯州、梧州、思恩、慶遠等府の紳民によって、匪首張家祥に代表される各反乱者が数千の匪賊を率いて至る所に掠奪をした…紳民が都察院へ控訴状を呈した…」<sup>43)</sup>とあるように、邸抄を閲覽することを通じて、都察院が受理した京控に触れることができた。「杜受田奏」のなかに、「…邸抄を比べて閲覽し、例えば署理広西龍平營都司譚勇徳、湖南桂陽營參將李英がかつて軍律を違反することがあつた…」とあるように、杜受田は邸抄を通じて、広西や湖南の軍事情報を収集していた。

さらに、以上の情報伝達手段を踏まえた上で、当時、署理広西巡撫に任命される周天爵は、杜受田に保薦（推薦）<sup>44)</sup>されたというように、官員間の個人的書信の交換といった情報伝達の関係網も存在していた。

要するに、咸豊帝から強い信頼を寄せられていた杜受田は、皇帝から召されたり、邸抄・在地知識人の控訴状に触れるなど多種多様な手段を用いて、北京で広西地方の状況を把握できたと言えよう。

杜受田は、広西の反乱者たちのリーダー「賊首」が広東の人であることを強調した。広東出身の反乱者は「広匪」あるいは「広馬」と呼ばれ、一方で広西出身の反乱者は「土匪」あるいは「土馬」と呼ばれ、その中で最も凶悪である反乱者の多くが「広匪」であり、その人数は数十人もしくは数百人であつた。地元の「土匪」が「広匪」に従い、略奪を行っていた。また、主に会匪から構成される反乱者は、普段は日常的な生活を営みながら、略奪を実行する際にはすぐに集結するという両広の反乱の特徴を明らかにした。実際に広西での散発的な反乱に対して、道光三〇年一〇月一六日の諭旨で、「総督・巡撫の上奏によれば、〔広西の反乱の原因は〕外来の遊匪や地元の土匪の間が結託したからである…なぜ〔それらの匪賊が〕至る所に掠奪をできたのか、なぜ〔反乱が〕同時に起こっていたのか」<sup>45)</sup>と言及した。そこで、両広の反乱に対する杜受田の分析は、個人的な意見というよりも、咸豊帝の関心に応えた形であつた。つまり、清朝中央政府は反乱の状況を把握できていた点を示している。

杜受田は最後に「潯州金田において多くの反乱者が蜂起している」と述べ、太平天国の初



期状況に注目できていた。元広西巡撫鄭祖琛、兩広総督徐広縉、貴州巡撫喬用遷、署理広西巡撫勞崇光などの地方官員の上奏と、「咸豊元年二月初八日・杜受田奏陳兩広起事情形並剿捕方略單」との比較を通じて、清朝中央政府は太平天国前夜の広西で、次第に太平軍の情報を把握し出した過程がうかがえる。

表3：太平軍の動態（典拠：『清政府鎮圧太平天国档案史料』第一冊により筆者作成）

史料出典	内容
「道光三〇年一二月一三日・鄭祖琛等奏報前任雲南提督張必祿病故及剿弁桂平等處会衆摺」 <sup>46)</sup>	桂平等地域の会衆（実際、それは拝上帝会頼九の部隊であった）を言及した
「道光三〇年一二月八日・勞崇光奏報督帶兵壯団練剿弁桂平金田会衆及副將伊克坦布等陣亡摺」 <sup>47)</sup>	桂平県の金田村における会匪を言及した
「道光三〇年一二月二〇日・李星沅奏報桂平金田大股会衆抗拒官兵亟籌攻剿並請簡提鎮大員摺」 <sup>48)</sup>	「金田村の賊首韋正、洪秀全は陰に尚弟会を組織した」
「咸豊元年正月二八日・李星沅奏報向榮統帶兵壯進攻大黃江牛排嶺遇伏傷亡情形摺」 <sup>49)</sup>	「数万人の金田の逆賊は大黃江において、反乱を興していた」「金田の賊はその巢窟付近に地雷を埋めた…官軍は力を尽くして敵を殺し発砲した…」

本稿が扱った「杜受田奏」のなかに「現在、潯州金田における匪賊は蜂起を起こし、大黃江に盤踞していた人数が万人と称された」とあるように、金田の匪賊の状況に言及した。杜受田は当時、潯州金田から始まった大規模な反乱の存在を強調し、なおその反乱を鎮圧できない状況が続いた場合、反乱が他の地域に広まる危険性を憂慮した。そのため、協弁大学士である杜受田は清朝中央官僚の視点から「整軍威」、「募精勇」、「勸郷団」、「察地形」、「務解散」という五つの方略を提議した。

## 二、「整軍威」について

杜受田は広西の反乱の状況をまとめた上で、まずは「整軍威」という方略を提出した。「整軍威」とは「軍威を整える」という意で、緑営軍の戦力と軍紀を強化し、軍事力を向上させることである。杜受田は「現在軍勢の不振は一日のみならず、各省みなそうであるが、広西は今尤も甚だしいである」と、従来の貴州・雲南・湖南から調達された六千余名<sup>50)</sup>の緑営軍が反乱を鎮圧できていない状況と、その原因が「緑営軍の訓練が不精であり、武芸と勇気が不足している」などにあると指摘した。

緑営軍は清朝の正規軍として、清朝の成立と発展の過程に重要な役割を果たしたが、一九世紀半ばから、衰退していった<sup>51)</sup>。緑営軍の衰退原因は、羅爾綱氏の『緑営兵志』による

と、道光二九年における緑営軍の人数について、清朝兵部の冊档に記載されたのは六一万余人<sup>52)</sup>であったが、「兵部の冊档に兵士の数と軍費が記載されたが、実際軍営内には兵士の数が足りなくて、軍費も不足していた」<sup>53)</sup>、そして「道光三〇年三月内閣への勅命によって、緑営軍の将領は自分の利益をえるために偽りの名前を捏造して軍費を横領した」とあるように、緑営軍では兵士の数が水増しされ、その将領が軍費を横領していたという問題が明らかにされた。また、羅爾綱氏は概括して鈐營（手を尽くして勢力筋に取り入り、私利をはかる）、取巧（軍隊の視察に来る際に病気を理由に職を辞する）、懶惰（軍事訓練を怠る）、克扣（兵士の給料をピンハネ）、庇盜（利益を得るために盗賊を庇う）、吸鴉片（アヘンを吸う）などの問題を述べた<sup>54)</sup>。

また、緑営軍では兵士の固定化という原則のもとで、兵士は地元住民に限られ、異郷の戸籍の人々は徴募されず、補充兵にもなることができなかった。そのため、反乱を鎮圧するために他地域へ派遣する場合、長い進軍による兵士の疲労によって、はかばかしい成果を上げられず、さらに緑営軍が他地域に派遣された地域の防衛が手薄になる点が指摘された。筆者はそのような従来の研究を踏まえた上で、清朝中央政府は緑営軍の形骸化問題をどの程度認識していたのか、それに対してどのような態度を持っていたのかというような問題に注目している。

前述のような、緑営軍の将領が軍費を横領したことを批判する道光帝の論旨によって、清朝中央政府は緑営軍の問題を等閑していたというわけではない。「杜受田奏」のなかで、緑営軍の問題を明確に指摘されていたということは、清朝政府側が当時の緑営軍の形骸化を、強く問題視していたことを示している。しかし、「賊が官兵を軽視する、反対に官兵が賊を恐る」のように緑営軍を批判する杜受田は、「用兵の道とはただ士気だ」（顧用兵之道、惟作其氣耳）、「号令を厳明し、信賞必罰をあげること」（号令嚴明、信賞必罰）に力点を置いた。すなわち、宋代や明代の統帥のように厳しく軍律を行い、事を誤る将領を処罰し、兵士を震え上げ、必死になって戦わせることに徹すれば、緑営軍の弱点を解決でき、兵士の士気をあげることを強調した。

さらに、杜受田は広西の反乱に対する緑営軍の調達について論じた。雲南・貴州の兵士が苗瑶の反乱をうまく鎮圧したが、雲貴の山道を通じてそれらの兵士を広西へ向かわせることよりも、福建・湖南の緑営軍を調達して水路で進軍させる方が良いが、広東の緑営軍は両広地域の反乱者のやりくちを熟知していたため、杜受田は「広西の賊を鎮圧するために、広東の兵は尤も適当だ」（弁粵西之賊、莫善於廣東之兵）と主張した。

しかし、道光三〇年八月からすでに清朝中央政府は、広西の緑営軍の無力さ<sup>55)</sup>に対して、両広地域内部の軍勢力を整えた上で、周辺の湖南・貴州・雲南からの緑営軍を調達し、広西の反乱を鎮圧させることを命じた。

表4：広西における緑営軍の調達状況（典拠：『清政府鎮圧太平天国档案史料』第一冊により筆者作成）

諭旨・上奏の時間	地域	主要な将領	兵力
道光三〇年八月初八日 <sup>56)</sup>	広東		広東兵一二〇〇名
道光三〇年八月初八日 <sup>57)</sup>	雲南	張必禄	
道光三〇年八月初一日 <sup>58)</sup>	湖南	向荣	楚兵一六〇〇名
道光三〇年九月初七日 <sup>59)</sup>	広西	徳亮	
道光三〇年九月初八日 <sup>60)</sup>	貴州		貴州兵二千名
	湖南		湖南鎮筵標營兵二千名
道光三〇年九月二五日 <sup>61)</sup>	貴州	徳安、周鳳岐	
道光三〇年九月二七日 <sup>62)</sup>	広西	李殿元、舒春	
道光三〇年九月二七日 <sup>63)</sup>	雲南		広南府に属する標營官兵二千名
道光三〇年一十一月初五日 <sup>64)</sup>	広西		撫・提兩標、全州、義寧官兵二千名
	広西	福謙	壯勇五百余名
道光三〇年一十一月二八日 <sup>65)</sup>	雲南	李能臣	

時系列では、広西の緑営軍の軍勢力は、まず広東の緑営軍の調達が注目されていたが、広東英徳・清遠等県の反乱の影響で、広西へ向かった兵力は少なかった<sup>66)</sup>。そして咸豊帝が湖南・貴州・雲南の緑営軍を広西へ向かわせたが、道光三〇年一十一月初七日になっても、一二〇〇名の貴州兵、一四〇〇名の湖南兵、二千名の雲南兵が広西に到着できていなかった<sup>67)</sup>。咸豊元年正月に欽差大臣李星沅は「官兵の数が六千名であった」<sup>68)</sup>と上奏しており、広西では緑営軍の兵力不足という問題に直面していたことがわかる。

以上の緑営軍の調達の状況を踏まえ、「杜受田奏」を見直すと、杜受田は広東の緑営軍の調達に注目していたことが理解できるであろう。彼は広東惠州・潮州に駐屯する清平陸路の諸營が、兵士を調達するのが可能であると分析した。「雲南・貴州の兵士より、福建・湖南の兵士を調達する方が良く、福建・湖南の兵士より、惠州・潮州の兵士を調達する方が良い」（調兵雲貴、弗若調兵閩湖、調兵閩湖、弗若調兵惠潮）とあるように、惠州潮州の兵士を調達すべきであると提議した。

むろん杜受田が「整軍威」方略の精神論（緑営軍の士気の強化）・現実論（他地域の兵士の調達）を主張したのは、緑営軍が衰退していたと把握した上で、清朝中央政府が「軍威を整える」ように、緑営軍を頼るのは、広西の反乱を鎮圧する際の基本方針であったと何うことができる。

しかし、緑営軍の兵士は兵部と呼ばれる機関で管理され<sup>69)</sup>、総兵のような将領は定期的に入れ換えられ、兵士とは精神的に離れていた。そのため、将領は中央から命令されて、反乱の所在地に派遣されるため、地元に住屯する緑営軍の兵士と将領は互いを知らず、反乱に対して力を発揮するのが困難であっただろう。表4が示すように、北京から故郷へ帰ってい



た前雲南提督張必禄を広西へ向かわせて緑営軍を率いるといった命令が、「将領と兵士の分離」の一例である。すなわち、緑営軍は前述した軍備、兵士素質、訓練など方面の問題と、将領と兵士の関係の弊害が絡み、一八五〇年末から、金田・牛排峠などの主要な戦役における緑営軍は敗走した。「紳民が自衛し、尚且つ兵を助けて賊を殺した、どうして各営の兵弁は力を出し民衆を保衛できないか」<sup>70)</sup>と兵士は戦争に怯え、「衛民の兵は、反対に民を害した。賊匪を捜査するために、民宅に入り略奪をした、その禍は賊と同じだ」<sup>71)</sup>といった混乱状況に陥っていた。

表5：緑営軍の戦況（典拠：『清政府鎮圧太平天国档案史料』第一冊により筆者作成）

時間	主要な将領	緑営の兵力（郷勇や団練を除く）	戦果
道光三〇年 十一月二九日	署理貴州鎮遠鎮総兵周鳳岐・清江協副将伊克坦布・署松桃協副将清長など	貴州鎮遠鎮・古州鎮の緑営軍	清軍が負けて逃げた。副将伊克坦布・把総潘継邦・劉洪海らが太平軍に殺された <sup>72)</sup> 。
咸豊元年 正月一八日	広西提督向榮・雲南臨元鎮総兵李能臣・署理貴州鎮遠鎮総兵周鳳岐など	雲南・貴州・湖南の緑営軍	太平軍に埋まれた地雷を踏んで、伏兵に襲撃されて大敗になった <sup>73)</sup> 。
咸豊元年 二月一七日	署理広西巡撫周天爵・広西提督向榮など	広西巡撫提督標兵・桂林官兵・貴州兵	太平軍の進攻を撃退したが、外委李吉元・范継昌が死傷した <sup>74)</sup> 。

こうした地方官員の奏摺から緑営軍の無力さがうかがえる。欽差大臣李星沅は署理広西巡撫周天爵に宛てる手紙のなかで、「最近匪賊の勢いは猖獗を極め、ほとんど賊が多く、民が少ない状況になってしまった。郷勇の徴募が難しいだけでなく緑営軍もあてにならない。その責任は提督・総兵が因循であり、将備も弁兵も気にせず、敵と会ったらすぐに負逃げ出し、すでに定番になった。」<sup>75)</sup>と述べた。

そのため、単に「有力な将領が緑営軍の号令を厳明し」、「惠州潮州の兵士を調達すべき」などの杜受田の「整軍威」方略だけで解決できるわけではなく、「杜受田奏」の方略は陳腐であり、現実に関わなかったと評価することが容易に認識できうる。

しかし、広東の緑営軍を広西の戦場へ向かわせるという杜受田の主張は、清朝中央政府の地方把握を示している。「杜受田奏」の「反乱状況のまとめ」が指摘したように、道光末年における諸反乱が、単に広西で起こったのではなく、広東でも起こり、さらに広東の匪賊が広西地域に影響を与えたことがわかる。広東の天地会などの反乱に直面して、鎮圧の責任を負う両広総督徐広縉は、道光三〇年五月に「地域別を問わずに教匪の首領を捕まえる」（不

分畛域、訪拿教首)<sup>76)</sup>と上奏したが、両広の反乱鎮圧の重点を広東に置き<sup>77)</sup>、広東の兵力を広西へ積極的に派遣しなくなかった。それらは、道光三〇年一二月において、広西の兵力が足りなかった局面で、欽差大臣李星沅は徐広縉へ手紙を出し、「前函のように、千人の潮州兵の派遣・武戦を選択してもらうことは、たしかに延ばせなかったことであつた」<sup>78)</sup>と述べていたが、咸豊元年正月初四日、李星沅の奏摺によると、「広東潮州兵の支援を求めることについて、昨日督臣（徐広縉）の返信をうけたが、自分の要請はなお認められなかったため、壮（勇）（団）練を兼用せざるをえなかった」<sup>79)</sup>。

そのため、杜受田の「整軍威」方略を見直すと、調達した雲貴湘の緑営軍が足りなかった状況に、兵力配置を調整するといった清朝中央政府の判断が示されている。つまり、「広西の反乱鎮圧の兵力を補充してもらう」というような在地官員の要請に対応したと言える。

「整軍威」方略が只の空論であり、現実的な役には立たなかったとの評価に与えることは容易であるが、杜受田が提議を出した根拠を明確にする必要がある。つまり、清朝中央政府の地方把握の視点を見落とすべきではない。その方略によって、清朝中央政府は緑営軍の問題を把握した上で、依然として緑営軍に主役に任せ、反乱を鎮圧しようとした態度が示されている。言い換えると、杜受田が「整軍威」方略を出すこと自体が、太平天国前夜の広西では匪賊が横行し、官軍（緑営軍）の無策及び秩序が崩壊していた証拠である。

そのような状況に陥っていた地元の民衆は、「人々は直接的な行動に訴えることで「理想なき時代」を乗り越える処方箋を熱望していた」<sup>80)</sup>というように、洪秀全の言説に頼って太平天国に希望を託すことが想定外な選択ではないであろう。

### 三、「募精勇」について

次に、杜受田は「募精勇」（精を尽くして、有力な郷勇を徴募する）の方略を提出した。

太平天国前夜の広西の「勇」<sup>81)</sup>と呼ばれる地元の民衆から徴募された義勇兵は、世兵制度によって軍籍を持つ緑営「兵」と比べ、軍事力が強く、清軍の先鋒として最前線で反乱者と戦った。

杜受田は郷勇を徴募すべきだと提議した。反乱者から清軍に投降した張国梁の部隊、つまり緑営軍に付属する郷勇について、杜受田は強い不信感を抱いていた。また、横州における反乱者張嘉祥（張国梁）についてももし当時、兵士を調達して張を鎮圧したら、速やかに殲滅できるはずだと述べ、左江鎮総兵盛筠がその時、張嘉祥に対して降参をすすめたことを批判し、降伏した張国梁が依然として陰で匪賊と結託していることを指摘した。

杜受田の方略で強調されているのは、精を尽くして、一千・二千人の「広勇」を徴募すること、つまり大量の金銭で郷勇を徴募し必死に戦ってもらうことである。杜受田は「楚匪李沅発滋事、粵西防御、曾有募広勇百余而抵数千之衆者」と湖南李沅発の反乱を鎮圧する際に、数千人の賊に対抗し、百余人の「広勇」が広西を防衛したことを例にあげ、「広勇」の戦力の強さを強調した。

そして「多為各処富商大賈傭工負販之徒」と、大多数が広東の豪商に雇用されたものから構成される「広勇」に、彼らを徴募する軍費は毎月七両銀で、緑営兵より多く、仮に「兩兵以為一勇之用」と、郷勇の給料を緑営兵の二倍にしても、郷勇の戦力を発揮させることで成功を収めたと論じた。

杜受田の「募精勇」方略は、清朝政府の郷勇に対する「戦時徴募、戦後解散」の原則と、軍紀の弊害を防止することを示し、「広馬の中の大半は広勇の徒であり、彼らが反乱に参加するのはただ利益で雇用され、略奪の金を分配するためだ」、「広勇を徴募して、賊で賊を鎮圧する場合、一つの勇が増え、一つの賊が減った」と認識した。

しかし、杜受田の「大量の金銭で郷勇を徴募する」方略と比べ、湘軍の創立者である曾国藩は、「郷勇は徴募されやすく、訓練が難しい。郷勇は弱々しい民衆であり、兵役に怯え、戦闘を怖がり、故に良民と有職業者は全員徴募に応じなかった。徴募された人は全て無頼漢であり、普段は無益に給料と食事を引き取り、いざという時は聴き伝えて逃走した。戦う際に、敵を見た途端に撤退し、民衆を略奪する際には勇ましく前進する。（郷勇兵は）長時間に緑営軍に付属し、（緑営軍の）兵士の悪い習癖に次第に染まり、凶悪や強請りに慣れていった」<sup>82)</sup>と、緑営軍に付属する郷勇を批判した。

そのため、従来の研究<sup>83)</sup>では湘軍の営制、営規を検討したように、曾国藩は郷勇の徴募標準を規定、訓練を重視し、「選士人、領山民」と、士人を選んで将領にさせ、農民である兵士をリードさせる方針を確立した。そのことから、郷勇に対して独特な利用法が示されている。

例えば、湘軍は「徴募される兵勇は必ず府・県・里における住所と両親・兄弟・妻子の氏名・指紋などの情報を登録する。これらの情報は綴り本で審査、記録される」<sup>84)</sup>、「徴募される兵勇は必ず手練の技芸を持っていて、若く頑健で質実な農民が優先である。市井の無頼漢や衙門の習癖を持った人を採用できない」<sup>85)</sup>という条件で兵士の徴募を行い、個人情報で郷勇に制限をかけながら、頑健で質実な農民を選択することによって、緑営軍の官僚習癖を避け、民衆への略奪を防止しようとした。

また湘軍は、意識的に兵士の素質を向上させ、「五更三点に全て起こす…黎明に朝の訓練を行う…正午に出欠をとる…」<sup>86)</sup>、「兵士を徴募するのは、賊を剿討し、民衆を愛護するためである。略奪を禁止しないなら、賊と同じにであり、賊よりさらに酷い可能性がある。その場合、官兵の存在する意義は何か」<sup>87)</sup>、「洋烟（アヘン）禁止…賭博禁止…騒ぎ禁止…姦淫禁止…噂禁止…結盟や組織に参加禁止…異服禁止…」<sup>88)</sup>といった「日夜常課の規」、「禁据民の規」、「禁洋煙の規」などの日常訓練の規定と禁令を施行した。従って、「広勇」と比べ、曾国藩は儒教の倫理によって郷勇を約束させたと強調した。

要するに、杜受田の「募精勇」方略と曾国藩の湘軍の規定は共に、「清朝側の郷勇認識」に関わっている。太平天国前夜の広西の反乱に対して、清朝中央政府は緑営軍を主役として鎮圧を行うことが杜受田の「整軍威」方略に現れたが、緑営軍の形骸化に対して、清朝側は

どのように反乱鎮圧のもう一つの手段である郷勇を認識していたのかという問題に対して、杜受田や曾国藩の答えを踏まえた上で、道光三〇年六月一九日諭旨<sup>89)</sup>に注目した。

その諭旨によると、咸豊帝は徐広縉、鄭祖琛の「各郷村の団練、壮勇は官兵に従って、捜査や逮捕に協力」の上奏に対して、「悉心籌議、実力弁理」とあるように、緑営軍に付属する郷勇の力をうまく利用する態度を示した。さらに「道光三〇年八月二六日・徐広縉奏覆籌弁両省剿捕事宜先不便遠離省城摺」<sup>90)</sup>によると、徐広縉は「緑営軍将兵が梧州へ防衛したばかり、ただ三百名の兵士を率いて、そのほか三百名の壮勇を雇った。合計では六百名であった。派遣される兵士の数は足りないため、壮勇を徴募することで軍勢を増大せざるを得なかった」と述べた。道光三〇年一二月二〇日、李星沅の上奏では、「郷勇を徴募して本省の官兵を補佐しようとした」<sup>91)</sup>と、郷勇が単に緑営軍に付属して補佐を行い、軍勢を増大させるものとみなされていた。

しかし、杜受田は、咸豊元年二月初八日の「募精勇」方略のなかで「大量な金」、すなわち利益により誘導し郷勇の戦力を発揮させて反乱を鎮圧することを提出した。「二つの兵が一つの勇になる」(両兵以爲一勇之用)という言説によれば、すでに清朝側の郷勇に対する認識は、「補佐や軍勢増大」の段階から、次第に「どのように郷勇の力を発揮するのか」という段階になったと言える。

さて、前述の「戦時徴募、戦後解散」の原則で、清朝中央政府は、団練・郷勇の力で反乱を鎮圧しようと期待した一方で、団練・郷勇の勢力の膨大化に懸念を抱いていた<sup>92)</sup>。しかし、太平天国戦争にて、緑営軍の江南大営・江北大営が潰えた代わりに湘軍が太平軍と対抗し、次第に戦場の主導権を握ることになったため、清朝政府は郷勇に対する態度を変えざるを得なかった。そこでまずに指摘すべきなのは、清朝政府側の郷勇に対する認識を動態的に把握したのである。そして「郷勇」を手がかりに、徐広縉・李星沅の認識、杜受田の「募精勇」方略、曾国藩の湘軍、太平天国戦場に徴募される郷勇、李鴻章の淮軍、練軍という時系列で清末史を再検討することに意義がある。

表6：清朝側の郷勇観の変化（筆者作成）

時間	人物	認識
道光三〇年六月一九日	咸豊帝	「各郷村の団練、壮勇は官兵に従って、捜査や逮捕を協力」 緑営軍に付属する郷勇の力をよく利用する態度
道光三〇年八月二六日	両広総督徐広縉	派遣される兵士の数は足りないため、壮勇を徴募することで軍勢を増大せざるを得なかった
道光三〇年一二月二〇日	欽差大臣李星沅	郷勇を徴募して本省の官兵を補佐しよう
咸豊元年二月初八日	杜受田	「大量な金」のような利益により誘導し郷勇の戦力を発揮させて反乱を鎮圧しよう
咸豊二年	湖南生員王鑫	湘郷県の湘勇、長沙へ支援

咸豊三年	曾国藩	儒教の倫理、制度の規定で郷勇をリード、湘軍を創立
太平天国戦争時期	地方大員	地元の郷勇を徴募、例え太平軍北伐軍に直面した欽差大臣勝保
太平軍・捻軍鎮圧の時期	李鴻章	淮軍を創立、湘軍に倣って勇営制度
同治帝時期	直隸総督曾国藩	練軍に勇営制度を実行

#### 四、「勸郷団」について

杜受田の第三の方略は「勸郷団」（郷民に団練の組織を勧めること）である。彼は白蓮教の乱における「堅壁清野」<sup>93)</sup>という方略を例にあげ、広西の反乱に対して地元の団練<sup>94)</sup>を組織することを提議した。「白蓮教の乱は機動性と柔軟性を備えた遊撃戦を繰り広げ、周辺の民衆に補給されながら情報を受け取った。これに対して硬直した清朝正規軍である八旗軍と緑営軍は形骸化とされた」という当時の状況は、フィリップ・クーン氏の研究によって明白になっている<sup>95)</sup>。

基本的に、「堅壁清野」という方略では、反乱が多発する地域の村落の周囲には堅固な障壁が築かれ、農産物や生活必需品を壁内に集中させる。また、村落の民衆がこのような堡壘に移らされ「団」という形式で組織させられ、推戴される「団」の首領として郷紳などの地方有力者の指示に従い、防衛工事や訓練を行う。反乱者が近づくと、村落の民衆は障壁で敵に対抗し、地域的「団練」を形成する。そして、土地を持たない農民または失業者の中から郷勇を雇用して地方防衛を担当させた。すなわち、団練、そして地元の防衛を担う郷勇の主要な点は、地元の民衆または本来は白蓮教の支持者を意識的に郷・団として組織させ、白蓮教反乱集団との関係を絶えさせることである。

道光三〇年九月、咸豊帝は「もし紳士商民の中に、団練を組織し、軍費を出資する人がいたら、地方督撫がその人々を上奏し奨励をする」<sup>96)</sup>とあるように、民衆に団練の組織を勧めることを命じた<sup>97)</sup>。さらに道光三〇年一〇月、徐広縉は「すでに広西の横州、博白両地域の団練規程に従って実行した」<sup>98)</sup>とあるように、地元の団練の組織を推進した。

しかし、「杜受田奏」によれば、太平天国前夜の広西団練の組織については、当時の象州韋氏郷紳は地元の団練を組織し、郷勇は数百の賊を殺したが、地方官員の与えた賞金が少なかったため、郷勇は騒ぎを起こした結果、解散した。そして広西博白・貴県・宣化などの地域に郷団は組織されたが、官軍がその郷団を助けず、複数の力を合わせた匪賊によって殲滅されてしまった。すなわち、当時の広西において、小規模な匪賊が暗躍することに対して、地元の郷紳が団練の組織を努めたが、地方政府や官軍による経済・軍事的支援が不足していたために、「郷団」が役割を十分に果たせられなかった。そのため、杜受田は「地方大員が民衆に広西の現在の事態を知らせ、恩恵で団練の組織を勧誘する」ことを提議し、「官員は寄付を募集したり、金を借りたり、〔団練を支持していた〕…」と、団練の組織に対して、



地方政府の経済的役割を果たすことを主張した。

杜受田の「勸郷団」方略は、咸豊帝が団練の組織を期待していることと照応できる。「募精勇」方略のような他地域へ出動し、緑営軍に付属して戦わせる郷勇と比べ、「勸郷団」方略は、団練の地元防衛を担わせることに注目されている。そして「どのように団練を組織するのか」という問題に対して、杜受田は地方政府の役割を果たすようにと主張した。

むろん団練と郷勇の差異については「郷土防衛」や「他地出動」の目的にあるが<sup>99)</sup>、杜受田の「勸郷団」方略と「募精勇」の共通点は、「民」と「賊」を転換する問題に関わることである<sup>100)</sup>。「広勇」を徴募すると、「広馬」である匪賊が減り、そして「団練」に組織されると、民衆が広西の反乱に参加することも起こりにくくなる。しかし、どのように無頼・農民といった異なる階層で構成された民衆を「郷勇」及び「団練」の陣営を導き、反乱を起させないで済むのかという問題に対して、杜受田は「大量の金銭で郷勇を徴募する」（首領重募）や「官員は義援を募集したり、金を借りたりして、〔団練を支持していた〕…」（官為倡捐以導之、或借助以資之…）と、利益で民衆に導くことにあとと指摘した。

## 五、「察地形」と「務解散」について

最後に、杜受田は広西の反乱に対して、二つの具体的な方略「察地形」（広西の地形を考察すること）及び「務解散」（匪賊になった民衆に勧告して、賊に脅迫させられた民衆を解散すること）を提議した。

杜受田は広西潯州である要地を提示し、当時潯州に集まっていた匪賊を殲滅することが緊要な問題であると指摘した。そこで、まずは潯州の匪賊を掃討し、次に雲南・貴州の官軍と協力して南寧府・太平府の匪賊を殲滅させ、最後に広東から西へ進軍する官軍と共に梧州府などの地の匪賊を全滅することを構想した。

しかし、潯州の匪賊である太平軍は、道光末年、金田で蜂起し、武宣・象州を経て、金田・新墟に戻った過程において、清軍は杜受田が構想していたような結果にならなかった。潯州の匪賊を全滅できず、むしろ何度も太平軍に撃退されてしまった。

また、杜受田は清朝統治の正当性を強調した。多くの民衆は、賊に脅迫させられたり、貧困ゆえ賊に従わざるを得なかったりしたため、「郷団」でそのような民衆を徴募し、「務解散」という民衆を賊から離す方略を提議した。それは、賊から離れた民衆を増やし、匪賊の規模を縮める効果を狙ったとともに、匪賊のリーダーである「賊首」を必ず厳罰に処して殺すべきことを強調した。その場合杜受田が、張国梁などの本来の反乱者から降伏した清軍将領に対して、「必ず罪滅ばしに手柄を立てる」というような厳しい態度を持ったのは当然であった。

また、太平天国戦争初期に緑営軍及びそれに付属する潮勇が、戦闘であることを理由に、農作物や酒などの物資略奪、民家への放火、婦女への暴行など残虐な行為が行われていた。そのため、広西の地元の民衆は反対に太平軍に参加するが多かった。

その中で最も意味深いのは、崔之清氏の研究で言及された事例である<sup>101)</sup>。一八五二年四月、太平軍は広西永安の根拠地から、清軍の包囲を突破して桂林へ進軍したが、太平軍に占領されて半年以上たった永安城に清軍が入城した際には、民衆は少なく、遺体も殆ど無かった。永安城が無人の城になったのは実に怪しい事件である。太平軍は永安城下で清軍に包囲されており、突破するのに民衆を脅迫しながら進軍することはできない。永安城の遺体から判断すると、太平軍の民衆虐殺も作り話である。つまり永安城が無人の城になった理由は、民衆が太平軍に追従したことしか考えられない。民衆は永安城で官軍たる緑営軍を待たなかったのは、清軍の略奪を憚ったということ。つまり、緑営軍や郷勇部隊の軍紀の混乱を裏付けることであり、「務解散」方略は一方的な願望になってしまった。

### 終わりに

本稿は、「咸豊元年二月初八日・杜受田奏陳兩廣起事情形並剿捕方略單」という史料に基づいて、清朝咸豊初期の重臣としての杜受田が広西の反乱に対して提出した方略を手がかり、いくつかの分析を行った。

協弁大学士・刑部尚書として、咸豊帝の強い信頼を得た杜受田は、皇帝の御召し、邸抄などの形式を通し、地方大員の奏摺・都察院が受理した京控案件によって広西地方の状況を把握し、当時の広西各地において暗躍していた匪賊をまとめ、張家祥のような広東出身の匪賊が広西への影響を論じた上で、混乱の局面に対して「整軍威」、「募精勇」、「勸郷団」、「察地形」、「務解散」といった方略を出した。

「杜受田奏」に対して、従来の研究は広西各地の賊首と反乱の状況をまとめたものにすぎず、五つの方略を一般的な視点から評価すると、白蓮教の乱以来提起してきた清朝官員の反乱に対する方策の限界を超えていないと認識されていた。しかし、史料を見直すと、杜受田の意見は往々にして咸豊帝の当時の判断と照応し、広西反乱によって臣下が皇帝への個人的な提議であるより、むしろ意識的に地方大員を指導する処方箋としての特徴が強く、清朝中央政府の反乱地の状況を把握していた程度を示すことができる。また、「杜受田奏」の方略は、緑営軍・郷勇・団練である反乱の鎮圧の手段を論じていた。咸豊・同治時期の清朝史研究をめぐって、向榮の江南大営<sup>102)</sup>、曾国藩の湘軍、安徽の地方団練といった重要な研究対象は従来の潮流に左右されていたが、「杜受田奏」の分析を通し、すでに太平天国前夜においても、緑営軍・郷勇・団練に対して、清朝中央政府の把握や認識がうかがえることが可能であろう。

広西の匪賊の鎮圧について、すでに官兵の衰退や問題を意識していたものの、杜受田は相変わらず緑営軍を主役として考えた。「号令嚴明」のように、緑営軍の士気の高める精神論だけでなく、一八五〇年末の軍隊調達の状況に基づき、たとえば広東惠州潮州の兵士を調達すべきだのように、鎮圧の現実に対応する方策が提出された。

また、清朝政府側には、郷勇のような民衆的武力を兵力の補充、軍勢を増大させるものと

認識していた時期から、儒教の倫理によって郷勇を約束する湘軍にかけての経緯が現れた。時系列を踏まえ、咸豊元年において、郷勇に対する清朝中央政府の認識は、「大量な金で郷勇を徴募する」という程度にとどまったと結論づけることができる。一方で、民衆的武力も「民と賊の転換」の問題と深く繋がっているため、清朝中央政府は団練・郷勇の組織で民衆を団結させ、その力で反乱を鎮圧しようと期待した一方、団練・郷勇の勢力の膨大化を懸念していた。問題の所在はどのように無頼・農民といった異なる階層で構成された複雑な民衆を味方に引き入れることであった。その答えは、杜受田の方略では依然として利益で民衆に導くことであった。

最後に、「杜受田奏」を切り口として、太平天国前夜における清朝中央政府の地方把握の状況を踏まえた上で、杜受田の「利益で郷勇を徴募する」方策から、曾国藩の「儒教の倫理で郷勇を組織する」ことに至る過程に見られるように、郷勇に対する認識の変化を意識することが重要であり、歴史を動態的に考察することの意義をあらためて提示したい。

## 註

- 1) 夏春濤「金田起義前夜の広西社会」『太平天国与晚清社会』、北京師範大学出版社、2018年。莊建平「金田起義初期戦役浅析」中国第一歴史档案馆『歴史档案』1982年第3期、1982年。周進「広西の起事：从天地会到拜上帝会 1804-1850」、中国社会科学院研究生院修士論文、2003年。
- 2) 菊池秀明「『動乱の時代』の幕開け—太平天国前夜の広西における下層移民と天地会系結社の活動—」国際基督教大学アジア文化研究所編『アジア文化研究』第34号、2008年。
- 3) 張英明「太平天国起義前夜広西局勢的特点及其影響」江西師範大学『江西師範大学学报・哲学社会科学版』第30卷第4期、1997年。
- 4) 彭大雍「近代初期広西天地会米飯主考探」広西社会科学院『學術論壇』1985年第1期、1985年。
- 5) 菊池秀明「広西における上帝会の発展と金田団営」国際基督教大学アジア文化研究所編『アジア文化研究』第35号、2009年。
- 6) 「清朝政府」は清朝の中央と地方政府を含み、「清朝中央政府」は、清朝の中央政府のみをさす。
- 7) 崔之清『太平天国戦争全史』第一巻、南京大学出版社、2018年、27-30、57頁。
- 8) 臆病かつ無能力。「諭内閣閣正鳳畏蕙无能著革職来京聴候查弁」『清政府鎮圧太平天国档案史料』第一冊、社会科学文献出版社、1992年、56頁。（以下、『清鎮圧』と略称）
- 9) 皇帝を欺き、反乱を粉飾して職務怠慢を言い繕う。「諭内閣鄭祖琛革職由林則徐暫署広西巡撫並仍詳查鄭祖琛等諱飾縱弛情節摺」『清鎮圧』第一冊、85頁。
- 10) 「勞崇光等奏報督帶兵壯団練剿弁桂平金田会衆及副將伊克坦布等陣亡摺」『清鎮圧』第一冊、117頁。
- 11) 崔岷「広西“匪患”与金田起事—基于清方軍事部署的考察」広西師範大学『広西師範大学学报』2010年第4期、2010年。
- 12) 夏春濤「咸豊朝官場乱象与社会危機—以太平天国初期戦事為主線の考察」安徽大学『安徽大学学报』2016年第1期、2016年。
- 13) 菊池秀明『金田から南京へ—太平天国初期史研究』汲古書院、2013年、92頁。
- 14) 「杜受田奏陳両広起事情形並剿捕方略單」では咸豊元年二月初八日を明記している。『清鎮圧』第

一冊、206-212 頁。しかし、道光三〇年一二月初一日の「寄諭李星沅等著查弁生員洗激清呈控各情並擇弁杜受田單開各条」のなかで「杜受田單」が言及されていたが、それは「刑部尚書杜受田関于兩広地区各種会党情形奏單」という史料である。(出典：方裕謹「道光三十年冬清軍鎮壓広西会衆史料」中国第一歴史档案館『歴史档案』1995 年第 3 期、1995 年。) すなわち、道光三〇年一二月初一日に言及された「杜受田單」と「杜受田奏陳兩広起事情形並剿捕方略單」が違うものであるといえる。

- 15) 夏春濤「金田起義前夜の広西社会」『太平天国与晚清社会』、北京師範大学出版社、2018 年、14 頁。
- 16) 崔之清『太平天国戦争全史』第一卷、南京大学出版社、2018 年、31 頁。
- 17) 中国社科院近代史研究所資料編輯室編『太平天国文献史料集』、知識産権出版社、2013 年、85 頁。
- 18) 清朝中央政府の視点に着目した研究としては、豊岡氏は「乾隆・嘉慶年間において実際に社会問題に対して解決策を模索するのは督撫を中心とする地方当局であって、最終的に事態の因果を説明し、位置付けを行う上諭を策定する北京の皇帝・軍機処など清朝中枢ではなかった。むしろ清朝中枢にとって重要なのは、その当時の政権のあり方や政治状況に適合した説明を行うことであったからである」と指摘した。豊岡康史「清代中期政策当局者の社会問題認識：海賊問題における「廢馳」・「盜首」論を中心に」東洋文庫『東洋学報』第 94 卷、2012 年。また、緒形氏は両江総督馬新貽の暗殺事件の調査の結果に対する清朝中央政府の態度に論じた。緒形康「馬新貽総督の暗殺とその共犯者を追う」神戸大学文学部『神戸大学文学部紀要』第 48 卷、2021 年。
- 19) 「朕自六歳入学読書、仰蒙皇考特諭杜受田為朕講習討論、十余年啓迪多方、恪勤罔懈、受益良多…杜受田著賞加太子太傅銜」『清代列伝・大臣伝續編六』卷四一、中華書局、1928 年、1 頁。
- 20) 「朕親政後、加太子太傅銜以刑部尚書協弁大学士」同上、4 頁。
- 21) 「特命管理礼部事務、每召見時於用人行政、国計民生、造膝敷陳、深資匡弼…」同上、4 頁。
- 22) 茅海建『苦命天子』の第二章では、杜受田と咸豊帝の關係、杜受田の地位について具体的に検討した。『苦命天子・咸豊皇帝奕訢』、上海人民出版社、1995 年。
- 23) 『清鎮壓』第一冊、212 頁。
- 24) 「擬整軍威、募精勇、勸鄉團、察地形、務解散五条、頗為詳晰」『清鎮壓』第一冊、213 頁。
- 25) 「整軍威、募精勇、勸鄉團、察地形、務解散五条、多有現已舉行…」『咸豊元年三月二八日・李星沅等奏報広勇訓練頗為得力先酌給功牌待查覈奏懇施恩片』『清鎮壓』第一冊、356 頁。
- 26) 張家祥即ち張嘉祥。「嘉祥、広東高要人…二十九年張嘉祥復起、据横之百合圩、四出勒富戸金…」『横県志』(民国)第五編、『太平天国革命時期広西農民起義資料』中華書局、1978 年、98 頁。(以下、『広西資料』と略称)
- 27) 「張釗、綽号大頭羊…先擾広東之三水、封川、遂逆流而上、由梧而潯而柳、旁及沿河村圩、皆被蹂躪。」『股匪総録』卷三、『太平天国史料匯編』卷一〇、鳳凰出版社、2018 年、4232 頁。(以下、『匯編』と略称)
- 28) 「陶八、賓州楊橋圩人。道光三十年二月与丁四等糾党二千余人、擾上林之白沙圩…」『股匪総録』卷一、『匯編』卷十、4213 頁。
- 29) 「夏四月、来賓賊首文亞英率党数千、攻入城外南街。知州陶錫圭撫陶八、擊退之。」『賓州志』(光緒)卷一三、『広西資料』、118 頁。
- 30) 「謝江甸、思恩府人、旗称広勝堂、久踞山心圩為巢。」『股匪総録』卷一、『匯編』卷一〇、4214 頁。「広勝堂、一名広志堂、匪首謝江甸…」『堂匪総録』卷四、『匯編』卷一〇、4263 頁。
- 31) 「土賊種敏和、鄧立奇各聚数百人、竄擾思德…」『蒼梧県志』(同治)卷一八、『広西資料』、79

- 頁。「道光二十五年、土匪首鄧立奇倡亂、自称平地王…」『藤県県志』（同治）卷二、『広西資料』、84 頁。
- 32) 「土匪種敏和、鄧立奇、鄧八等、亦聚黨流劫長行、東安諸鄉…」『蒼梧県志』（同治）卷一八、『広西資料』、87 頁。
- 33) 「九月六日、匪首陳亞潰等陷石龍新圩…」『貴県県志』（民国）卷一六、『広西資料』、64 頁。「三十年、武宣匪首陳亞潰、鄭廷威糾黨千余…」『荔浦県志』（民国）卷三、『広西資料』、65 頁。
- 34) 『清鎮圧』第一冊、18 頁。
- 35) 『清鎮圧』第一冊、2 頁。広西巡撫鄭祖琛への寄諭によれば、慶遠の張家福、鍾亞春・柳州の陳亞潰、潯州謝江殿などの反乱者が言及された。
- 36) 『清鎮圧』第一冊、139 頁。
- 37) 『清鎮圧』第一冊、144 頁。
- 38) 『清鎮圧』第一冊、64 頁。
- 39) 『清鎮圧』第一冊、86 頁。
- 40) 『清鎮圧』第一冊、34 頁。
- 41) 前注の史料の付件二「広西慶遠府生員莫子昇等呈文」『清鎮圧』第一冊、37 頁。
- 42) 殷晴氏は「邸報（邸抄）とは、宮廷の動静、皇帝の諭旨、大臣の上奏文を日ごとにまとめて掲載した小冊子である」「邸報の一構成としての「上奏文」を説明し、「毎日、一通から四通ほどの上奏文とそれに対する皇帝の指示が、添削や解説を加えずにそのまま邸報に掲載される」と指摘した。殷晴「清代における邸報の発行と流通—清朝中央情報の伝播の一側面—」公益財団法人史学会、『史学雑誌』第 127 卷 12 号、2018 年。
- 43) 「呂賢基奏陳広西急宜安閭閻以消反側摺」『清鎮圧』第一冊、47 頁。
- 44) 「據工部尚書杜受田、保舉前任漕運總督周天爵。」『文宗顯皇帝実録』卷七、華文書局、1964 年、130 頁。および「尚書杜受田以天爵對、遂起広西巡撫。」趙爾巽『清史稿』卷三九三、中華書局、1976 年。
- 45) 「該督撫奏稱、或係外来遊匪、或係土匪互相勾結…何以四處搶掠、同時並發。」「寄諭林則徐著到任後查明広西起事各股情由並查訪文武各官確情具奏」『清鎮圧』第一冊、79 頁。
- 46) 『清鎮圧』第一冊、103 頁。
- 47) 『清鎮圧』第一冊、117 頁。
- 48) 『清鎮圧』第一冊、131 頁。
- 49) 『清鎮圧』第一冊、187 頁。
- 50) 「寄諭林則徐著酌量地勢敵情通盤籌画分投進剿」『清鎮圧』第一冊、65 頁。
- 51) 趙治国氏は『仁宗睿皇帝実録』により嘉慶年間河南は兵士の欠員を補充しようとしたが、緑営軍の少ない収入では生計を維持できず、予備兵丁がその応募をしなかった事例を指摘した。趙治国「清代緑営兵役制度的特点研究」内蒙古自治区社会科学界聯合会『前沿』第 262 期、2010 年。李元鵬氏は、緑営軍が労役の役割と軍事訓練を共に担当させたが、政務についての労役にばかり力を尽くし、軍事訓練が足りなかったと指摘した。李元鵬「清前中期八旗緑営軍事訓練」濱州学院『濱州学院学報』2013 年第 2 期、2013 年。崔之清氏は、小農経済のモデル、人口問題、官僚の腐敗、アヘン戦争の影響、緑営軍の指揮体制等によって、緑営軍の形骸化問題を検討した。崔之清『太平天国戦争全史』第一卷、南京大学出版社、2018 年、9 頁。
- 52) 羅爾綱『緑営兵志』『羅爾綱全集』第一四卷、社会科学文献出版社、2011 年、261 頁。
- 53) 羅爾綱氏は、左都御史趙申喬「核兵額以杜冒餉疏」（『皇清奏議』卷二四）という史料を手がかり



- に、「冊上有兵、伍内無兵、紙上有餉、軍内無餉」というような状況を指摘した。前掲『緑営兵志』、264 頁。
- 54) 『東華録』、『曾文正公奏稿』などの史料によって、羅爾綱氏は、「鈇營、取巧、懶惰」のほか、「奉迎、油滑、開賭場」等の緑営軍の問題も指摘した。前掲『緑営兵志』、269 頁。
- 55) 龍啓瑞「粵西団練輯略序」によれば、「本省兵馬各有守地、顧此失彼、輒不相及、即及之而兵力不足…」とあるように、広西地元の緑営軍の無力さの状況が述べられている。龍啓瑞『經徳堂文集』（『統修四庫全書』所収）上海古籍出版社、2003 年、578 頁。また『潯州府志』、『梧州府志』、『鎮安府志』などの地方志史料を踏まえると、緑営軍の兵力の不足の状況がうかがえる。たとえば、数千人の匪賊と比べ、潯州府の緑営軍の定額（兵士の定員数）は一〇六六名、梧州府は一〇四四名、鎮安府はただ四五〇名だけであった（道光一七年より）。『潯州府志』（同治）卷一八、2 頁。『梧州府志』（同治）卷一〇、17 頁。『鎮安府志』（光緒）卷一七、7 頁。国家図書館編『地方志人物伝記叢刊・華南卷』国家図書館出版社、2016 年。
- 56) 「寄諭鄭祖琛等親往修仁督剿並查明城內文武各官下落」『清鎮圧』第一冊、20 頁。
- 57) 「寄諭徐澤醇著即伝旨飭令前任雲南提督張必祿馳赴廣西會剿」『清鎮圧』第一冊、21 頁。
- 58) 「寄諭駱秉章著於粵楚交界處所扼要防範並著向榮馳赴廣西剿弁」『清鎮圧』第一冊、22 頁。
- 59) 「諭內閣著沿途各省督撫查催廣西左江鎮總兵德亮迅速赴任」『清鎮圧』第一冊、41 頁。
- 60) 「寄諭裕泰等選派精兵二千名迅赴廣西並著貴州預選兵弁備調」『清鎮圧』第一冊、43 頁。
- 61) 「番用遷奏報遵派官兵赴廣西堵剿並巡查邊界情形摺」『清鎮圧』第一冊、58 頁。
- 62) 「諭內閣著將進剿遲緩之副將李殿元等革職留任並准休致游擊秦紹謙等隨營差遣」『清鎮圧』第一冊、63 頁。
- 63) 「寄諭程喬采張亮基等著速調官兵二千名馳赴廣西協剿」『清鎮圧』第一冊、65 頁。
- 64) 「鄭祖琛等奏報捕獲鍾重春等並進剿金田等處情形摺」『清鎮圧』第一冊、94 頁。
- 65) 「程喬采奏報所調官兵分路出省赴廣西及連界處所布防情形摺」『清鎮圧』第一冊、113 頁。
- 66) 「寄諭徐廣縉等著專弁廣東軍務並按指示方略相機堵剿」『清鎮圧』第一冊、53 頁。
- 67) 「寄諭林則徐等進剿賀縣左右江所屬各股並查明保奏出力人員」『清鎮圧』第一冊、98 頁。
- 68) 「李星沅奏報金田形勢及慎密籌剿事宜片」『清鎮圧』第一冊、147 頁。
- 69) 根無新太郎氏は、「兵部は軍事行政を担うが、緑営に対する指揮権は持っていない」と指摘した。また、「その指揮権は皇帝の専権である。だが実際は各省の督撫の裁量に委ねられていた」とあるように、羅爾綱氏の議論も言及された。根無新太郎「一八六〇年代、清朝中央による首都防衛構想について―直隸練軍試論を兼ねて―」東洋文庫『東洋学報』九九卷四号、2018 年。羅氏の議論については前掲『緑営兵志』、431 頁。
- 70) 「寄諭林則徐等著林則徐專弁廣西剿捕軍事務獲鄭廷威等股首」『清鎮圧』第一冊、85 頁。
- 71) 「寄諭李星沅等著照有人所奏悉心体察妥為駕馭廣西現調兵丁毋使害民」『清鎮圧』第一冊、124 頁。
- 72) 『清鎮圧』第一冊、118 頁。
- 73) 『清鎮圧』第一冊、187 頁。
- 74) 「咸豐元年三月二日・李星沅等奏報進剿武宣東鄉等處情形摺」『清鎮圧』第一冊、257 頁。
- 75) 「正月初五日・周敬修中丞」湖湘文庫編輯出版委員會編（王繼平校）『李星沅集』第二冊、岳麓書社、2013 年、1152 頁。
- 76) 『清鎮圧』第一冊、3 頁。
- 77) 「道光三十年八月二四日・兩廣總督徐廣縉為廣東亦有會黨不宜前去廣西事奏摺」方裕謹「道光三十年清政府鎮壓廣東等地會黨反清闘争史料」中国第一歴史檔案館『歴史檔案』1996 年第 2 期、

1996 年。

- 78) 「一二月一四日・徐仲紳制軍」湖湘文庫編輯出版委員會編（王繼平校）『李星沅集』第二冊、岳麓書社、2013 年、1132 頁。
- 79) 『清鎮壓』第一冊、147 頁。
- 80) 菊池秀明「永安州時代の太平天国をめぐる一考察」国際基督教大学アジア文化研究所編、『アジア文化研究』第 36 号、2010 年。
- 81) 『清政府鎮壓太平天国档案史料』などの史料によると、「壮勇」や「郷勇」と呼ばれる。例としては、「各处壮勇亦多奮勉出力」「鄭祖琛奏報捕獲鐘亞春等並進剿金田等处情形摺」「清鎮壓」第一冊、95 頁。「招募郷勇、以佐本省官兵」「李星沅奏報勇練及張家祥情況並密陳通籌剿弁対策片」「清鎮壓」第一冊、135 頁。
- 82) 「咸豐三年・批彬州稟隣境土匪未盡与所属永興地方緊要、必須練勇巡防、未便全撤并懇飭發銀兩以資濟用」李翰章編『曾文正公全集』批牘卷一、吉林人民出版社、1995 年、1207 頁。
- 83) 羅爾綱『湘軍兵志』『羅爾綱全集』第一四卷、社会科学文献出版社、2011 年、81 頁。また市古宙三「太平天国概観」『近代中国の政治と社会』東京大学出版会、1971 年、22 頁。
- 84) 「營規・招募之規」李翰章編『曾文正公全集』雜著卷二、吉林人民出版社、1995 年、1779 頁。
- 85) 「營規・招募之規」同上、1779 頁。
- 86) 「營規・日夜常課之規」同上、1779 頁。
- 87) 「營規・禁据民之規」同上、1781 頁。
- 88) 「營規・禁洋烟等事之規」同上、1782 頁。
- 89) 「諭徐広縉等実力緝拿兩広起事各股摺」中国社科院近代史研究所資料編輯室編『太平天国文献史料集』、知識産権出版社、2013 年、45 頁。
- 90) 『清鎮壓』第一冊、30 頁。
- 91) 「李星沅奏報勇練及張家祥情況並密陳通籌剿弁対策摺」「清鎮壓」第一冊、135 頁。
- 92) 陳駿氏は、団練に対して清朝政府の複雑な態度に論じた。たとえば、雍正・乾隆時期において、辺境地域の反乱鎮壓のために組織された団練と郷勇については、清朝政府の内部では意見の対立が発生した（孔毓珣と鄂彌達）。とくに、白蓮教の乱において、地方官員は団練組織の名義を借りて、軍費に水増しをしたことがわかった。陳駿「清前期団練問題研究」中国人民大学清史研究所『清史研究』2021 年第 5 期、2021 年。
- 93) 合州知州龔景瀚は当時「堅壁清野並招撫議」を上奏して、「団練郷勇を設置し、保甲を検して、地方自衛のために費用を自弁した。」ことを提議した。沈兆溥編『蓬窗隨録』『近代中国史料叢刊・第四〇輯』文海出版社、1966 年、591 頁。
- 94) 団練と郷勇の差異は、団練は地域の治安維持、郷勇はより機動性、他地域へ戦うことが指摘された。P. H. Kuhn, *Rebellion and Its Enemies in Late Imperial China: Militarization and its Social Structure 1796-1864*. Harvard University Press, 1970. 中国語：孔飛力『中華帝国晩期の叛乱及其敵人：1796-1864 年の軍事化与社会結構』中国社会科学出版社、1990 年。
- 95) 前掲注 94、40-41 頁。
- 96) 「寄諭徐広縉等著飭属分路嚴防勿任竄逸勾結並勸導紳士商民自為団練資助軍需」『清鎮壓』第一冊、44 頁。
- 97) 「寄諭徐広縉等嚴剿兩広各股并通飭各県弁理団練」『清鎮壓』第一冊、40 頁。
- 98) 「寄諭徐広縉等著參酌広東防夷団練章程於兩広熟籌妥弁」『清鎮壓』第一冊、77 頁。
- 99) 前掲注 94、また目黒克彦「咸豐初期団練の成立について—湘勇の母体としての湘郷県の場合—」

- 中国文史哲研究会『集刊東洋学』第46巻、1981年。
- 100) 民と賊の転換関係について、団練では「民衆の反体制側への流出を阻止した」という役割が従来の研究で明になった。吉澤誠一郎「天津団練考」東洋文庫『東洋学報』第78巻1号、1996年。  
任建敏「咸同年間広西潯州的堂匪、団練与地方権力結構的変動」中国社会科学院近代史研究所『近代史研究』2020年第1期、2020年。
- 101) 崔之清『太平天国戦争全史』第一巻、南京大学出版社、2018年、308頁。
- 102) 龍盛運『向榮時期江南大營研究』、社会科学文献出版社、2011年。